

パイプオルガンのトリビア

～ vol.5 ～



ステンドグラスが見たくて教会に行ったことがある、そんな人も多いでしょう。色とりどりのステンドグラスは見る人の心を和ませてくれます。さてヨーロッパの教会建築はキリスト教の宗派によって違いがあるのをご存知でしたか？

その大きな違いは「明るさ」です。オランダの教会を訪れた多くの方が「(中が) 明るい」という印象を持つようです。オランダは暗くて寒いから窓を大きくしたのかな？と憶測する方も多いようですが…。その理由は少し違います。

ちなみにオランダの主要な教会といえばオランダ改革派教会※。カルヴァン派の流れを汲むプロテスタントの教会です。オランダ人の牧師が私にこう説明してくれました。「カソリックの人々は十字架を信じ、イスラムの人々はモスクを信じ、私たち(改革派)は聖書を信ずる」のだと。

オランダ改革派教会にとって最も大事なものは、聖書「神の言葉」です。例えばカソリックの信者が信じる聖母マリア、聖人を信仰しません。オランダ改革派教会の中には(ローマやカソリックの大聖堂に必ずあるような) 豪華な祭壇や彫刻は一切ありません。

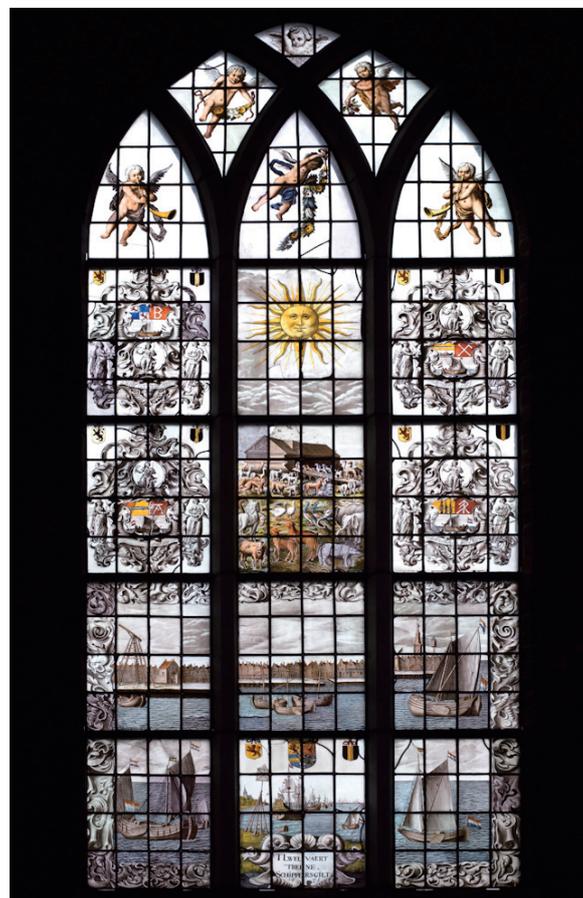
オランダ改革派教会の中が明るいと感じたのは、会衆がきちんと聖書が読めるように陽光がさしこむように配慮し設計されているからです。それに比べ(聖書朗読の比重が低い) カソリックの大聖堂はノートルダム寺院もケルンの大聖堂も堂内が薄暗いです。

オランダ改革派教会には聖書を朗読するための説経台はあるのに、十字架はかかっていません。信仰対象は聖書の文字のみ→聖書に書かれていない十字架は教会建築に必要なし、というわけなのです。もちろん祈る時にも十字を切りません。

キリスト教といってもローマ・カソリック、ルター派、改革派…と数多くの宗派があり、神学的信条もさまざまです。遠い昔イエス・キリストの弟子たちは布教のなかで、その土地の原始信仰と融合できるように工夫を重ねたといわれています。紀元前からの豊穡の神や大地信仰が定着していた当時のギリシャやローマの人々がキリスト教の教えに上手くなじめるように、大地信仰に変わる母性的な象徴(聖母マリア)を登場させたといえます。当時の宗教家たちの努力を感じずにはいられませんね。

1517年の宗教改革を機にキリスト教は大きく変革し民衆化をとげていきます。その波はパイプオルガン音楽、演奏そのものに大きく影響していくのです。(vol.6につづく)

※ 註：オランダ王室をはじめ今日多くのオランダ国民がオランダ改革派教会に属す。しかしオランダ南部はその例外だ。かつて南ネーデルランド(現在のベルギーとルクセンブルグ)の支配下にあったこの地域にはカソリックの信仰が残り現在に至った。ブレダやマーストリヒトなどオランダ南部はカソリック文化圏として知られている。マーストリヒトのカーニバル(謝肉祭)が有名だが、そもそも謝肉祭はカソリックの伝統行事。もちろんプロテスタント圏に属するアムステルダムやユトレヒトには謝肉祭の習慣はない。



写真上：レンブラントが埋葬されるアムステルダムの西教会。内部は明るく静謐。十字架はない。
写真右：西フリースランド港町メデンブリックの様子が描かれたステンドグラス。

塚谷 水無子(つかたに みなこ)

東京芸大卒業後オランダへ。オランダ、日本を中心に活動するオルガニスト。オランダでリリースされた2枚のCD「風のささやき1・2」(キングインターナショナル)、クラシックの名作を集めオルガンの魅力の全貌に迫るCD「癒しのパイプオルガン」(キングレコード) 大好評発売中。www.minakotsukatani.com



■ CD左・中央：「Whispering winds (風のささやき)」第1集・第2集 アムステルダム西教会売店(アンネフランクの家の横)にて好評発売中。メールオーダーも可能。
orgel@bonifaciuskerkmedemblik.nl

■ CD右：「癒しのパイプオルガン」